

何才くらいになるまで、誕生日って嬉しいって思うんだろう？ふとそんなことを考える。

今どきの女の子なら、「20才を過ぎたら、もうおばさん、誕生日なんかもう来て欲しくない！嬉しくなんかないわ！」なんて言うでしょうね。

「女性に年齢なんか聞くものじゃないわ！」なんて言われ、「誕生日プレゼント、もうそんなものが楽しみな年令じゃないよ…」なんて言われ、誕生日は加齢とともに歓迎されなくなるもののようです。

誕生日って、実はかわいそうなやつかもしれない。

それでも誕生日についての楽しい思い出は、誰にでも心の中に一つや二つはあるのではないのでしょうか？

これが欲しいなんて一言も言っていないのにプレゼントの箱を開けてみたら、その中身が自分の希望とピタシカンカンだった時の喜び、片思いだと思っていた相手から突然届いた大きな包み、誕生日なんてもうとっくに忘れていたに違いないと思っていた時に届く息子、娘からの「今までありがとう、元気で長生きしてね」のメッセージカード、どこかくすぐったいような嬉しさが誕生日にはあります。

その昔、もっと平均寿命が短くて、さらに乳幼児の死亡率が高率だった時代、誕生日には、お七夜やお宮参り、初節句や七五三などの行事が示す通り、乳幼児の健やかな育ちはそれこそ神頼みで「よくもここまで無事に育てくれた」の喜びが溢れていたように思います。

実は、誕生日には、「生まれて来てくれてありがとう」「よくぞここまで健やかに育てくれてありがとう」という、生まれて今ある存在そのものに対する感謝が含まれているのです。

そして、それをいま最も純粋な形で残し、あるいは表現しているのは知的障がい・自閉症の方々ではないかと感じます。生きることにいささかの不自由があり、幸福になるためには越えなければならないいくつか

のハンディキャップがある彼らだからこそそれを強く感じるができるのです。

なぜなら明星学園において、誕生祝いは無くては鳴らない一大イベントであるからです。うっかり忘れようでもしたらそれは大変です。体も動かない言葉をしゃべることができない方ならその怒りを38℃、39℃の突然の発熱という形で表現します。大小便の失敗などほとんど無い方が、2回3回と大小便の失敗をしてくれます。職員が忘れたことに怒りが収まらない方の中にはパニックを起こす方もいます。しかしその怒りは当たり前ののです。

「生まれて来てありがとう」そのことに対しては知的障がい・自閉症の方々には少々の(大きな?)不安があります。「本当に私は生まれてきて良かった存在なのだろうか？」そこには全く自信が持てない彼らです。そして、その自信の無さを埋めるための手段が誕生祝いというわけです。

「生まれて来てありがとう」「生まれてきたことはちっとも迷惑なことではないよ」「あなたが生まれてきたことで私たちが不幸になったわけではないよ」「あなたと出会えて本当に良かった」…、多くのポジティブメッセージが誕生祝いに込められています。

大きなホールケーキを囲んで出勤職員が集まる、ろうそくに火が灯され、ハービーバースデイの大合唱、誕生日おめでとうの言葉のあと渡される誕生日プレゼント、これが明星学園の誕生祝いの4点セットです。

温かな穏やかな時間が流れていきます。